

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 佐川大晟 年齢 18 歳 職業 学校名 白河高校

あの日を思い返すことは、その間隔が少しずつの
 づつ広くな。てきてしま。ている。しかしあ
 の日は私達福島県民、日本人にとって「忘れ
 てはいけな日」とな。た。あの日以来、私
 達は一体何を想。て生きてきたらうか。原
 発事故など、今だに復興の見通しがたたない
 ものもあるけれど、着実に以前の姿を取り戻
 しつつある。それでも決して戻。てこない世
 のがある。それは亡くな。た一人一人の命に
 ある。大切な家族を失。た人々にとってば
 「忘れられない日」以来どんな気持ちで生き
 てこられたのか、自分には想像もできない辛
 く苦しい日々であ。たのではないのかと、最
 近強く感じるようになった。

今年の春から、福島を離れて東京での大学
 生活が始まるが、今生かされている幸せを感
 じたい。どのような方法があるかは分からない
 けれど、やはり福島復興に関わり、恩返
 りができるようにたくさんの方の事を学。び、経
 験を重ねていきたい。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 大龍 裕史

年齢 18 歳

職業

学校名 白河高校

「ゴォォォォ」という地鳴り音が聞こえてきた。今でもあの音は忘れられない。三月十一日、卒業式の後で少し肌寒い日だ。た。その音がして三秒程たった時、私の周りにある物が揺れ始めた。最初は少ししか揺れなかったが、地鳴りは続き次第に大きな揺れがきた。この世の終わりが来たのかと思うほど経験したことの無い揺れがきて危険を感じ、階段を駆け降りた。階段は上下左右に大きく揺れていてまるで生きていようであった。あの時の感覚は一生忘れられないだろう。大きな余震や原発への恐怖感に毎日縛られ、精神的にも苦痛だった。しかし悪いことばかりではなかった。被災して二週間程宇都宮に滞在した時にあそラーメン屋に行きた。そのラーメン屋の人は優しい言葉をかけてくれて、別れ際に後で食べてくれとギョーザをくれた。暗くなっていた心がとても明るくなった。た気がした。その時、人の優しさというものを痛感した。

(20文字×20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 小野 剛史 年齢 18 歳 職業・学校名 福島県立白河高校

東日本大震災が起きた当時、私の父は福島
 第二原子力発電所がある楡葉町の学校に勤務
 していた。震災が発生した時、私の姉の卒業
 式のために白河に帰ってきていたが、家族の
 安否が確認できると、次の日には楡葉に戻っ
 ていき、今度は勤めていた学校の子ども達と
 その家族の安否や被害状況を確認していた。
 楡葉町の人達が避難しているいわき市と会
 津美里町の体育館に父と一緒に行く機会があ
 った。その体育館には子どもからお年寄りま
 でたくさんの方が宿泊まりをしていたので、
 とても窮屈そうに生活していた。しかし、そ
 んな大変な時に私が見たのは、みんなが助け
 合っている姿だった。中学生や高校生が小さ
 い子ども達の面倒をみていたり、大人の人達
 が一緒になって炊き出しをして、体育館で生
 活している人全員に配っている姿を見て、困
 った時こそ助け合う事が大切だと改めて気づ
 く事ができた。
 私も人と助け合い生きていきたいと思う。

(20文字×20行)

「声の大きさを調節し、体験談と復旧への想い」麻生田紙

匿名希望

私は、この最近の東日本大震災の記憶が、
 すでに園化してつづきの子のどけなうかと思えます。
 ず。私自身の記憶は、今ではあの日を覚えています。
 うますが、被害の少なからず、下地域の人は、
 覚えている子でしうか。
 7/7には、現在も仮設住宅に居住の方々の
 映像が、原爆の復旧作業の様子を放映している
 はずで、しかし、これは画面の中でしか見えない
 がありません。この目で実際に見ている人は
 少なからず、どけなうか。近頃は、
 震災の映像も7/7で見なくなると、たまたま、原爆
 の関心も報道が少なからず、さげすまれます。
 このままでは、この社会が、忘れられてしま
 うかと思えます。考えを述べさせていただきます。
 3/11の事態は、存在する。私は、そ
 う一度、今の福島を見つめ直す必要があると思
 います。今では終戦後の原爆事故、風評
 被害。これは現在も続く東日本大震災の被
 害です。二度と同じ事がある被害を出さない
 ために、決して園化させようとは思いません。

(20文字 × 20行)

「東日本大震災」の体験談と個人の想い 紙田真一

匿名希望

3月11日、当時その日は中学校の卒業式だ
 ったので、学校を早く終えた私は友達と母校
 の小学校へ遊びに行っていました。そして図
 書室にいる時、東日本大震災が発生したのだ
 す。机の下に隠れるのがやっとで、これまで
 経験したことのない大きな長い揺れでした。
 マンホールは浮上し、近所では土砂崩れがあ
 り、それらはテレビでしか見たことのないよ
 うな光景でした。それに重なり、放射能の心
 配が私達をより不安にさせました。
 現在の私の周りでは、地震の修復作業は終
 わりに近づいているようですが、除染作業は
 未だ続いている所があります。震災から5年
 が経ちますが、除染の様子を見るとその日の
 ことを鮮明に思い出すことができます。だか
 らこそ、その記憶と経験をこれからの世代に
 伝えていかなければならないと思います。私
 はこれからも“福島のためにできること”に
 ついて考えていきます。なぜなら、この故郷
 福島が好きだからです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 込山美紗希 年齢 19 歳 職業 学校名 福島県立白河高等学校

東日本大震災が起きた当日の4時30分
 のゆれの恐怖を今でも忘れていません。
 地震が起きた後、家はほぼ何もなくなりました。余震
 の怖さもあつた。歩いて十分ほどの父の会社へ
 行き、会社の前の公園で待っていました。す
 ると、会社の前が「おさきちゃんさん大丈夫や
 ー」と私に気がつき、声をかけてくれました。そ
 れで会社の中へ入れてくれ、アロンゲットを
 かけてくれました。その時、人の温かさや優
 しさを感じました。その後、父が来ると安心
 して泣いてしまつた。そのことを今でも覚えています。
 私はこの地震で津波の恐怖は体験していま
 せんが、当時は毎日のように津波による大崩
 壊の毛のが流され、死体発見のニュースが流
 れていました。また、原子力発電所がどうな
 るかわからなく不安を抱えたまま生活してい
 ました。このような事実には忘れてはいけな
 いことだと思ふので、後の世代へ話をし伝えて
 いくべきだと私は思っています。

(20文字×20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 佐藤 仁者 年齢 17 歳 職業 学校名 白河高等学校

早いもので、次に三月十一日を迎えると、東日本大震災から五年経つことになるが、一体世間の人々ほどどれくらいこの震災のことを気に留めながら、日々の生活を送っているだろうか。

私は、震災の翌年に自分にできることはなにかと悩んでいた際、市が主催する姉妹都市交流事業に興味を持ち参加することを決めた。この事業は、私が住む白河市と姉妹都市提携を結ぶフランスのコンピエーニュ市とホームステイや学校訪問を通じ、交流を深める目的だった。私はこの機会を利用し、福島のことを伝え、色々な情報が交錯する中本当の福島を、福島の魅力伝えたいと思い、覚えたての英語を使い必死で伝えた。その結果、ホストファミリーが是非福島に来て欲しいと言ってくれ今でも交流を続けている。

震災が残した課題の消化を進めることが、これからの問題であるが、一番大切なのは震災を忘れないことだと私は思う。

「東日本大震災の体験談と復興への願い」応募用紙

匿名希望

2011年の3月に起きた東日本大震災で
 私たちの生活は大きく変わりました。原発事
 故が起こり、農家の方々は風評被害にあい、
 放射線の数値を気にしながら生活するようにな
 っていました。現在でもニュースを見てい
 ると時々風評被害のニュースが出てきます。
 私はこれを見るととても悲しい気持ちになり
 ます。今年たまたま今でも風評被害に悩まされ
 ている方々がいらっしゃると思うと、この事故の規模
 の大きさを実感します。震災が起きてる中で
 今年にはなりませんが、まだまだ震災による被害
 、津波による被害は残りたままです。元の状
 態に戻るのにはとても長い時間がかかるかも
 しれません。それでも少しずつ元の状態に戻
 ることを祈っています。自然はいつ何が起こ
 るか分かりません。今回起きたことを無駄に
 しないよう、日頃から災害が起きた時、文
 字に対して対応できるようにしっかりと準備をし
 ておきたいです。

「青口大十郎」の作詞・作曲・編曲・録音

匿名希望

私、中学一年生の時に起こった東日本大震災
 から年月が経ち、現在高校三年生となり、受
 験シーズンとピリピリしている。あの日以来
 私の生活は変化した。震災の影響で給食セン
 ターが崩壊し、当たり前のように食べていた
 温かい給食が、県外から運搬された冷たい弁
 当となった。正直、あまり喉が通らなかつた。
 食料確保にも悩まされた。白河市内のスーパー
 にはほぼほとんど無く、食料を買うために県外
 へ行くことが多々あった。高校生となり少し
 復興し始めたが、一番は原子力発電所の影響
 による風評被害である。福島県にはりんごを
 はじめたくさんの特産品があるが、福島県産
 という文字だけでも敬遠されてきた。また、家
 畜動物の殺処分も胸を痛める光景だった。現
 在白河市では街づくりとして市立図書館、街
 中にメンションを建て、現在建設中の新しい
 市民文化会館など地域活性化している。この
 ように、地域活性化する中町村が福島県内で
 増えれば活気がまた戻ると思う。

(20文字×20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 太田 翼 年齢 18 歳 職業・学校名 福島県白河高校

私が東日本大震災を経験したのは、中学1
 年の時だった。私は自宅で祖父母と震災を経
 験した。今までに味わったことのない激しい
 地震に驚き、すぐに家の外へ逃げたのを覚え
 ている。今でもあの恐怖は忘れられない。揺れが
 おさまらずテレビをつけてみると、津波が沿岸
 部を襲う様子、火災や地震による土砂崩れの
 様子などが放送されていて、自然の脅威を思い
 知らされた。スーパーやコンビニに行けば物
 がない。窓口をひねればきれいな水がでる。
 スイッチを押せば電気がつく。今まで当たり
 前だと思っていたことが決して当たり前ではな
 いと感じた。あれからもうすぐ5年
 が経つ。現在、当時の当たり前ではない日々
 のことを多くの方が忘れかけているかもしれ
 ない。しかし今でも仮設住宅で暮らしたり全
 国各地に避難している人々がいる。そのこと
 を私たちが忘れてはいけない。当り前の日
 常が幸せであることを忘れず生活したい。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 鈴木 葵

年齢 18 歳 職業 学校名 白河高校

二十一年三月十一日、当時中学一年生だ
 った私は、産まれて初めて震災というものを
 体験しました。友人の家に遊びに行っていた
 私は、突然の出来事にわけがわからなくなり
 パニックに陥りました。夜になり、家族が集
 まった時、やっと安心することができました
 ですが、その時全く食欲がなく、父親が買っ
 てきてくれたわずかな食料を、少しも口にす
 ることができなかったことを、今でも長く覚
 えています。当時一番困っていたことは、水
 を得ることでした。電気はすぐに復旧したも
 のの、蛇口から水が出るようになったのは、
 ずいぶん後の事であったように思えます。その
 ことから、今でもペットボトルの水を飲む
 時、当時の事を思い出します。私は、当時を
 思い出すということは、悪いことではないと
 思います。そして、このような震災に備え、
 避難場所の確認や、防災グッズの管理など、
 今からできることをきちんとやるということ
 がとても大切だと思っています。

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 近藤 涼加 年齢 18 歳 職業・学校名 白河高校

平成23年3月11日、私は中学校の卒業式で3年生を送り出し、部活の時間まで自宅でくつろいでいる所でした。テレビからのけたたましい音、それに続く大きな揺れで驚きながら、従妹と二人でこたつに潜りました。茶の間の茶箆等の上の物が落ちる音・収まる気配のない揺れで恐怖だったのは忘れられません。その後外に出ると瓦屋根が落ち、塀が倒れ、あちこちが大変なことになっていました。人は驚きすぎると涙が出ない人だと思いました。

その後、学校の休校が続いたり、テレビや携帯の緊急地震速報の音にも敏感に反応するようになり、変則的に来る予震に怯える生活にこれからどうなるのだろうと不安でした。そして、放射能の件。色々匂いがないのであまりピンと来ず、当時は普通に生活をしていましたが、最近になって、甲状腺の検査の数値が高くなり、甲状腺がんが増えているといふ話を聞くと、不安は続きます。

(20文字 × 20行)

「希望の名」の体験と希望の相対性 藤田草紙

匿名希望

ぼくは、中学一年生の時に、東日本大震災
 を経験しました。ちょうど姉の卒業式の日で
 帰りが早く、友達と遊んでいる時に東日本大
 震災が起きました。ぼくはその時、友達と、
 TSUTAYAについて、いろいろな棚がなか
 いっぱい倒れていてもおすごくこまか、お
 のをおぼえています。

地震だけでなく、放射能被害もあり、外で
 あまりあそぶことができなくなりました。今で
 もまだ、原発に近く、避難している人が、た
 くさんいます。自分も大学ほになら、たう、復
 興のボランティアなどに積極的に取りくんで
 いき、自分から行動していき、少しでも自分
 の力が復興のために役に立てばいいなと思
 っています。

少しでも早く、震災前のような生活にして
 いくために、多くの人に呼びかけ、知って
 ほしい、より多くの人から復興への力を貸して
 もらえるように、自分も、おとこかんばって
 たいです。

匿名希望

今までに感じたことのない地震の揺れ、あ
 のとき中学1年生だ。た私は友人と遊んでい
 た。友人と一緒にいたため、恐怖はそこまで
 なかったが、1人のときあの地震が来ていた
 ら、とてつもない恐怖に襲われていたと思う。
 震災から4年と10ヶ月、復興と言っても
 福島に戻ってくる人は少ない。福島に住んで
 いる自分たち学生もどれほど復興が進んでい
 るのかも、除染が済んでいるのかもよくわか
 らない。今住んでいる町こそ、放射線の数値
 は低いものの、県内には数値の高いところは
 たくさんある。校庭の表面を削り取る作業は
 していただいたが、実際数値を気にしていな
 い。当時被災地で実際に被災した先生方は、
 グリントに当時の様子をまとめてくれた。テ
 レビでは放送されないリアルなものであった。
 被災地にも訪れたが、おしきなどはなく、
 ていたが、道路以外は何もなかった。先生方
 から話していただいたことをそのままにして
 おかずに、後世に引き継いでいきたい。

「吉口本大雲の体験談と復興への想い」応募用紙

匿名希望

卒業式があり、わずかに春の訪れを感じて
 いた三月十一日。私は決してあの日を忘れる
 ことはないだろう。私はいつも通り友人と遊
 んでいると聞き慣れない音楽が流れた。緊急
 地震速報だ。その後とて強い揺れに襲われ
 た。強い揺れの後、家族も友人も皆無事で私
 は安心していた。しかし、停電が回復し電氣
 が復旧した午後十時。テレビをつけると私は
 驚きのあまり言葉を失った。津波により家は
 流され、多数の死者が出ていた。あの日から
 すべてが変わっただろう。家族を失った者、
 友人を失った者、故郷に帰れなくな、た者。
 この私にと、てあたり前のように過ぎていく
 時間は、彼らが生きてたか、た時間。私はこの
 時間を決して彼らのことを忘れてはけな
 ない。また、辛いこと、悲しきこと、果しきこと、
 嬉しきこと全部含めて生きていくこと
 であり、それが人生である。その現実に向き
 合い、彼らの分も精一杯生きていく必要があ
 ると思う、

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

匿名希望

東日本大震災が日本を襲ったあの日、私は
 卒業式を終え一人部屋でテレビを見ていまし
 た。けたたましい音と共に慌てた様子のアナ
 ウンサーが画面に現れた時、私は頭の中が真
 白になりました。その直後が「ゴゴゴ」とい
 う音と共にマグニチュード9.0の大地震
 が日本を襲いました。私は体が硬まり、動け
 ませんでした。すると、隣の部屋から大急ぎ
 で私の元にやってくる父に、「瑠梨、何して
 るんだ。早く逃げるぞ。」と言われました。そ
 の日から3日はまともな食事もとれず、辛い
 日々を過ごすしました。
 復興が進んだ今でも福島第一原子力発電所
 事故による風評被害に苦しんでいる人が大勢
 います。旅館を経営していた私の友人も風評
 被害により客が入らず、旅館を辞め関西に引
 越してしまいました。4年たった今でも完
 全な復興はできていません。これからはい人
 一人力を合わせ活気ある日本にしていきま
 しょう！

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 矢内 良依 年齢 19 歳 職業・学校名 白河高校

今年の3月11日で東日本大震災から5年が
 立ちます。5年前の3月11日、私は卒業式を
 終え家にいました。家でいつものようにテレビ
 を見ていると携帯電話の緊急地震速報が鳴
 り、すぐに大きな地震がきました。それは私
 が今までに経験した事がない大きな地震でし
 ました。私はすぐに2階の床の中に隠れて地震がお
 さまりのを待ちました。地震がおさまり家の
 中を見わたると、物が落ち食器が割れていま
 した。そしてテレビをつけてどの番組もそ
 の地震のことばかりでした。その時私はその
 地震の大きさを実感しました。そして、改めて
 震災の怖さを知りました。日々ちゃんとなく
 受けていた学校での避難訓練の大切さも改めて
 感じ、真剣に取り組まなければならぬと
 思いました。東日本大震災で辛い思いをした
 人はたくさんいます。今も辛い思いをしてい
 る人がまだたくさんいます。私はこれからも
 その出来事を忘れずに七十年経ってしまった人
 の分までしっかりと生きていきたいと思います。

(20文字×20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 山内 有希 年齢 17 歳 職業・学校名 白河高等学校

今	の	ら	う	年	前	に	東	日	本	大	震	災	が	起	こ	り	ま	し			
た	。	当	時	私	は	、	中	学	1	年	生	で	先	陣	方	の	卒	業	式		
が	終	わ	り	自	宅	で	テ	レ	ビ	を	見	て	い	ま	し	た	。	そ	の		
時	、	突	然	緊	急	地	震	速	報	が	鳴	り	震	れ	始	め	ま	し	た		
本	来	で	あ	れ	ば	私	の	下	に	隠	れ	る	べ	き	で	す	が	あ	わ		
て	て	い	に	に	め	外	へ	と	飛	び	出	し	て	し	ま	い	ま	し	た		
外	で	は	道	路	が	曲	が	り	な	が	ら	震	れ	、	車	は	ま	る	で		
飛	び	跳	ね	て	い	る	様	な	光	景	を	目	に	し	ま	し	た	。	家		
の	中	で	は	食	器	が	床	に	落	ち	て	も	歩	く	事	は	で	き	ま		
な	い	状	況	で	し	た	。	そ	し	て	、	次	の	日	か	う	は	断	水		
が	起	こ	り	ま	し	た	。	配	給	さ	れ	た	水	は	、	ト	イ	レ	ヤ		
料	理	に	使	う	の	に	精	一	杯	で	お	風	呂	に	入	る	事	は	で		
き	ま	せ	ん	で	し	た	。	し	か	し	、	私	の	家	の	近	く	に	お		
寺	が	あ	り	困	っ	た	時	は	お	互	い	様	と	い	う	事	で	井	戸		
水	を	共	有	さ	せ	て	く	れ	ま	し	た	。	家	族	全	員	で	お	寺		
か	ら	バ	ケ	ツ	リ	リ	レ	ー	の	様	に	水	を	運	び	ま	し	た	。	そ	
の	た	め	お	風	呂	に	入	る	事	が	で	き	ま	し	た	。					
こ	の	東	日	本	大	震	災	で	改	め	て	近	所	の	か	か	わ	り			
合	い	の	大	切	さ	を	学	び	ま	し	た	。	今	後	も	大	切	に	し		
て	い	き	た	い	で	す	。														

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 三浦 弥和 年齢 18 歳 職業・学校名 福島県立白河高等学校

東日本大震災が起きた日から5年が経とうと
 している今、震災のあとは消えつつありま
 す。福島県は第一原発が発電所の事故で大き
 な被害を受けました。私の住む県南地区は発
 電所と近い訳ではなく、放射線量もとても高
 いということはありませんでした。しかし
 放射線量を気にして少しの期間福島を離れた
 時期もありました。今ではそのようなことも
 なく放射線のことも頭から消え始めをします。
 最近、福井原発の再稼働が決まりました。たとい
 う
 ニューズを見ました。電力を確保するために再稼
 働は避けられないことなのかもしれませんが
 私の住む福島県と同じような思いはしてほし
 くないと思います。事故が起きてからは
 遅く取り返しはつきません。5年が過ぎよう
 としている今でも避難している人たちはまだ
 たくさんいて、震災前の生活に戻ることほ
 びたい人が多い人がいます。そのことを忘れず
 いう自分が同じ立場なるかわからないという
 意識を持って生活してほしいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 緑川真唯 年齢 18 歳 職業・学校名 福島県立白河高等学校

私は、東日本大震災が起こったとき、一人で家にいました。ふつうの地震かと思っ、ていたらしいも以上にとてもゆれが大きくなり、ついにしゃないなとおもひこたつの中にもぐりました。なかなかゆれがおさまらなく、長い間こたつの中で家の物が落ちる音やお皿がわれる音がずっとときこえていてとてもこわいおもひをしました。ゆれがおさまったこたつの中からは出てみると、棚など全部たおれていて、う下にびくと冷蔵庫が移動して、たり食器棚がたおれてお皿が床にわれて大量にちりばつていて足のすけがないうどでした。自分の部屋ももちろん大きい棚がたおれて大変なことになったと思いました。外を見ると駐車場がまじつたつにわれていてとてもびくくりしました。余震がずっとときこえたのですがその時は自分は中学1年生で家に一人だったのどうしていいのかわからず、とにげられないうどいました。その後はがソリンなどがなかなか買えないなど困ったことが多くありました。

(20文字 × 20行)

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 若林拓海 年齢 17歳 職業・学校名 白河高校

2011年3月11日、この日から私の自然
 災害への考えが変わりました。地震が発生し
 た時私は一人でコンビニにいました。当時中
 学生だった私はコンビニのパンやお弁当、棚
 にある数多くの商品が落ちてきたりと今までに見
 たことのない光景に当惑してしまじ屋。しか
 し、見ず知らずのおじさんに「申分まで」と
 とコンビニの外から大声で叫ばれ、やっと我
 にかえることになった外へと出ることをさま
 しました。その後コンビニの中は散らばり人々が
 割れてガラスが飛び散っていました。もしあ
 のままコンビニにいたら私は大怪我をしてい
 たかもしれません。名前も何も分からないお
 のおじさんにほんの少しに感謝していきま
 す。私はこの事を経験し、災害時何より大切な
 のは人と人とのつながりそして互いに助け合
 うことだと実感しました。福島をはじめ、復
 興が進んでいける地域はまた多くありま
 す。一人一人が助け合い、一刻も早く復興を望ん
 びます。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 下重陽 年齢 18歳 職業・学校名 白河高等学校

東日本大震災から四年。私の住む街は、そ
れほど被害は受けなかったのですが、当事の
事を今でもほ、きりと覚えています。
その時、私は家に一人が居ました。大きな
地震が来て、不安と恐怖がいっぱいでした、
しばらくして、祖母が帰、起きた時のホッと
した気持ちには、今でも鮮明に覚えています、
そして、夜にたまり家族が全員帰、起きた時
家族がいる幸せを心から感じました。
震災から四年経、た今でも、福島県は完全
に復興出来てはいません、何万人もの人が、
避難生活を未だに送、ています。私は、今、
自分が普通の生活を送れていることを心から
感謝したいです。多くの人が、また元の生活
を送れる状態になることを願、ています。
そして、この震災で起こったことを世界に
さらに後世に語り継いでいくことにより、福
島の復興へと繋がり、また、このような被害
をもう二度と起こさないようにすることへと
繋がって行くのだと私は思っています。

「吉口太夫の休庵記と復讐人の想い」麻葉用紙

匿名希望

私は今年の初めに部活動の一環で相双地区
 を訪れ、原発の影響で人が住むことができず
 震災当時のまま残されている住宅街を視察し
 ました。誰もいない空っぽな街は今まで体験
 したことのない異様な雰囲気でした。来年の
 3月で震災からはや5年が経ちますが仮設住
 宅で暮らす人々も多勢いて、元の生活に戻る
 ことができない人がたくさんいる現状です。
 ニュースでは双葉に除染排棄物が搬入されて
 いるというのを耳にしました。それではその
 場所に住んでいた人たちはますます元の場所
 に戻れなくなってしまうと思います。しかし除染排
 棄物を受け入れる場所はまだ決まりませ
 ん。人々が安全に暮らすためには一部の人が
 犠牲にならなくてはならないと思うととても
 残念です。だからと言って簡単に福島県を元
 に戻す方法が見つかる訳ではないのでどうす
 ることが被災者にとって一番最善なのかその
 人たちの立場に立って考えることが大切だな
 と感じ自分もそうしたいと思いました。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 藤澤 大樹 年齢 18 歳 職業・学校名 白河高校

2011年3月11日突然悲劇は起きました。
 この地震で私達は普段の生活ができなくなりました。ある人は部活をやっていたり、仕事をしていたり、遊んでいた人。様々な形で普段の生活を過びしていただろう。その数秒後には普段の生活ができなくなると思ってもいいなか。ただろう。予想できない自然現象はできて怖いものなのだから。
 私達は子孫にこの体験をこのように伝えていくのが大切になってきます。この体験を実際に体験しないことには、実際地震が起こった場合にどのような対策をすればいいかわかるように対応したらいいかわかりません。そのためにも、私達が体験したことを子孫に伝えていかなければならぬのです。実際に被害にあつた遺造物の保存や、父や母になつた場合には子供に伝えることが大切です。何より一番伝えたいことは、普段当たり前のように生活していきながらたみというものを子孫に伝えていきたいです。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 山内和樹 年齢 18 歳 職業・学校名 白河高校

東日本大震災によって、誰も予測が出来な
 いほどの地震や津波によって、多くの人々が
 家族、友人、家など、数えきれないほどたく
 さんの大切なものを失ってしまいました。そ
 んに加えて原子力発電所の事故で、多くの人
 々が避難を余儀なくされ、今も今まで通りの
 生活に戻れない人達がいまいます。そのなかでも
 日本には、主に海外または被災しなかった
 県からたくさんの方の食料支援、ボランティア活
 動、救助活動が行われ、被災者の方々達を手
 助けしてくれました。

また、この震災を通して、「絆」、「思い
 やり」というものが日本に生まれたと思いま
 す。私も実際にボランティア活動に参加しま
 したが、日本を助けたいと思っている人がた
 くさんいて、自分でも実際に思いやりと絆と
 いうものを感じました。今後は、まだ復興し
 ていない所への早い復興をするために、募金
 することや、この事を知らない子供達や、海
 外の方に伝えることが大切だと思います。

「声口オキニ」の体験談と復興への想い 応募用紙

匿名希望

2015年4月、福井地裁は重大事故に陥る危険性があるとして、高浜原子力発電所再稼働の差し止めを命じた。しかし、原子力規制委員会への審査に合格したことや、知事や町長らの同意を得たことで、同地裁は4月の決定を取り消した。これにより、再稼働へ近づいた。最近、このような原子力発電所再稼働への動きが多いように思う。もう一度、福島事故について日本全体で考えていく必要がある。

再稼働の一因となった新規制基準は不十分な所がある。それは「5年猶予」だ。重大事故対策として建設が必要な設備の設置には5年間の猶予期間が与えられるというものだ。この5年間の間に事故が起きたら、福島事故の繰り返しになってしまう。新規制基準は世界一厳しいと言われているが、不十分な所が多い。この不十分な所を無くして初めて、原子力発電所を使っていくことができる。

将来、原子力発電所に関する事故が起らないことを願いたい。

「東日本大震災の体験談と復興への想い」応募用紙

氏名 神 とも香

年齢 17 歳

職業・学校名 白河高校

2011年、3月11日に東日本大震災が
 起こりました。福島県は、巨大地震に加え、
 原発事故も起き震災前は全く考えもしなか
 った、放射能の影響を受けました。
 震災から、もう少しで5年経とうとしてい
 ます。福島県の復興は着実に進んでいると感
 じます。震災後、大幅に減ってしまった観光客
 の数を徐々に増え始め、さらに、福島県産の
 野菜や果物も震災前のように大勢の人が食
 べるようになってきました。しかし、中には未だに
 福島を放射能の町などと呼ぶ人がいること
 も事実です。全てのことを完璧に震災前の状態
 に戻すことはできません。けれども、少しで
 も以前のように明るく、活気のある福島県に
 近づけることは、震災を経験した私たちの努
 力によります。とびきると感じます。この震災を淡
 して忘れることなく、若い世代の人を、他県
 の人々に福島県の良さ、安全さをアピールす
 るなど、小さなことでも積極的に行うことで
 福島はさらによくなると思います。

(20文字×20行)

35,000円とらふ引かれ。裁
お金もあと数ヶ月でなくなつてしまふ所。
どこからか収入のあてをなくして、はたから物
どうして生計していくか、目前が真の難し。
自命の生え本故郷の植葉町に早く帰りな
気持ちでいはいで。

以上で。

~~復興の想~~

復興の想

1/23

「福島県知事、内閣府、維新、一歩、
震災と原発事故による風評と風化といふ。事
困難の集題は打ち勝つためには安全、安心、
向けた取り組みも土台として福島の魅力と懸命な
あきらめ、受けとる責任の重さの下に、
として原動力を磨き上げ、今後忘れず

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 大谷真輝 年齢 12歳 職業・学校名 石神第一小学校

ぼく	の	復	興	への	想	い	は	、	二つ	あり	ます	。	一						
つ	目	は	、	震	災	で	死	な	ん	し	た	人	た	ち	が	福	島	県	に
も	ど	う	て	き	て	ほ	し	い	と	い	う	想	い	が	す	。	理	由	は
死	な	ん	し	た	人	達	が	も	ど	う	て	く	れ	ば	福	島	県	が	も
と	も	さ	か	え	て	い	た	こ	ろ	の	人	口	に	少	し	か	つ	も	
ど	う	て	に	ギ	ヤ	カ	に	な	る	こ	思	っ	た	か	ら	で	す	。	そ
の	た	め	に	も	復	興	に	向	け	て	働	い	て	い	る	人	達	に	か
ん	ば	、	て	も	ら	い	た	い	で	す									
二	つ	目	は	、	今	の	じ	ょう	き	じ	ょう	は	以	前	通	、	こ		
い	た	病	院	が	な	く	な	っ	て	し	ま	い	不	便	に	な	っ	て	し
ま	た	こ	こ	で	す	。	他	の	病	院	も	か	っ	て	い	ま	す	が	
混	ん	で	い	て	中	々	順	番	が	こ	な	く	て	待	ち	時	間	が	長
く	な	っ	て	し	ま	い	大	変	な	時	が	あ	り	ま	す	。	お	医	者
さん	の	人	達	が	少	し	で	も	増	え	く	れ	れ	ば	良	い	な	と	
思	っ	て	い	ま	す	。	そ	の	他	に	も	、	お	店	も	閉	ま	っ	て
い	る	所	が	あ	る	の	で	再	開	し	て	ほ	し	い	で	す	。	そ	う
す	れ	ば	少	し	か	つ	で	も	こ	の	町	が	福	島	県	が	復	興	し
て	い	る	と	実	感	が	き	る	の	で	は	な	い	か	と	思	う	か	ら
で	す																		

(20文字 × 20行)

匿名希望

震災からあともう少しで、5年がたちます。
 津波で流されてきたがれまなでは、ボランティア
 や自衛隊などの人々のおかげで町はきれい
 になり、自分たちがその町の中に入れる様
 になりました。けど放射能が高い所がまだあ
 ります。高い所がなくなれば安心して外に行け
 楽しく遊べます。今度は、簡単なものからや
 っていばいと思います。帰ってくる人もい
 ると思ふけど、せめてその家や土地を手放して
 火もいると思います。そうゆう人のために
 早くもどれるようになつてほしいです。
 自分は特に、原子力発電が悪いとは思いま
 せん。原子力のおかげで電気がつかえてこれ
 ていたと思います。なので原子力を減らす
 自然エネルギーを増やしていければいいと思
 います。そうすれば電気をいっはいいつくる所
 で有名になつて人が来てくたたりして豊かな
 所になつてくれたらいいと思いました。

氏名 五十嵐 圭 年齢 12 歳 職業・学校名 石神第一小学校

できるだけ、早く復興してほしい。理由は、
 南相馬に住もうと思う人が少なくなっている
 から。じゃ、せん作業者の人がきこから、事件
 や、事故が少くた、たからこからの理由でほ
 くは、早く復興してほしい。
 ほくは、南相馬市にこしてきてから一年の
 東日本大震災がある、左のこをまたた知らない
 震災がある、こから外にこを遊ぶこも少なく
 たり、友達と遊ぶ時間と学校の休み時間に遊
 るくらいた、左、こをさして人は、復興して
 こを友達と遊ぶ回数もふえてまた、
 東日本大震災がある、こから、こをさすう
 は体験もうけたり、して人び、してこをさ
 くようにたり、人々のやさしさがよくあつ
 た、こをさすうな体験をした、
 はなればなれにたつた友達は、今こをさ
 いるのかとこをさしたる。
 まる昔のように、みんなこをさしく笑える日々
 かくるこをさしたる、ほくは、思、こをさ
 早く復興してほしい。

氏名 岩崎 仁 年齢 12 歳 職業・学校名 石神第一小学校

ぼくは、東日本大震災を経験して、いろいろ
 な事を学びました。
 まず、一つ目は、友達との別れです。友達
 との別れは、とてもつらく、悲しかったです。
 それに、東日本大震災後一回も、会えていな
 い友達もいるので、いまだに悲しみは、消え
 ません。
 そして、二つ目は 大震災のつらさです。
 ぼくは、震災の時、新がたに、避難しました。
 避難した場所には、知っている人もいないし、
 友達もいないので、悲しかったです。でも、
 新がたに避難したこと、良かった事もあり
 ました。良かった事は、新がたの学校で、
 たくさんの友達ができた事です。学校の人
 みんなやさしいし、とてもにぎやかで楽しい
 学校生活でした。
 南相馬に帰ってきてからは、なつかしい友
 達がいて、とても喜びました。それから、
 友達がどんどん増えて、とても楽しくなりま
 した。やっぱり石神は一番いいと思いました。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 安藤 佑真 年齢 12 歳 職業・学校名 小学生 石神第一小学校

あ	の	震	災	か	ら	も	う	す	ぐ	5	年	が	経	ち	ま	す	。	ほ	
く	は	そ	の	後	の	原	発	事	故	で	ひ	な	ん	し	、	ひ	な	ん	先
か	ら	も	ど	、	て	き	た	時	に	知	り	ま	し	た	。	ほ	と	ん	ど
の	お	店	が	閉	店	し	静	か	な	町	に	な	っ	て	い	ま	し	た	。
ほ	く	は	、	震	災	の	状	た	い	か	ら	復	興	す	る	た	め	、	
ま	ず	に	除	染	作	業	を	一	早	く	終	わ	ら	せ	る	。	人	を	増
や	し	、	店	を	開	店	さ	せ	、	活	気	を	取	り	も	ど	す	。	そ
う	す	る	こ	と	で	、	震	災	か	ら	の	復	興	に	近	づ	く	こ	と
か	で	き	る	と	考	え	ま	す	。										
ほ	く	は	、	こ	こ	周	辺	が	復	興	す	る	こ	と	を	願	い	ま	
す	。	け	し	て	、	簡	単	な	こ	と	で	は	な	い	け	れ	ど	、	こ
こ	に	も	前	の	よ	う	な	活	気	が	ほ	し	い	と	考	え	て	い	て
前	の	よ	う	に	、	子	供	が	い	て	、	楽	し	い	町	に	も	う	一
度	も	ど	、	て	ほ	し	い	と	思	っ	て	い	ま	す	。				
も	う	一	つ	は	、	も	う	こ	の	よ	う	な	ひ	な	ん	が	起	こ	
ら	な	い	よ	う	に	、	こ	の	地	震	で	こ	わ	れ	て	し	ま	、	た
場	所	な	ど	は	し	、	か	り	対	し	よ	し	て	ほ	し	い	と	考	え
て	い	ま	す	。															
ほ	く	は	、	震	災	に	負	け	ず	、	こ	の	町	が	発	展	し	て	
い	、	て	ほ	し	い	と	思	い	ま	す	。								

氏名 岡 夏輝 年齢 12 歳 職業・学校名 石神第一小学校

今の南相馬と

岡 夏輝

今の南相馬は、放射線が多く放射線量が高いです。それに小人が少なくなり、大人が増えています。その中で小学校にはあまり小人がいません。大人のほうが多くなってきています。その中で放射線量の高いところがある。その中で除染員がたくさん働いています。その中には大人がいました。風が吹くとその事件に巻き込まれた。その中で除染員の人はいろいろ大変なところからきています。その中には一人一人はいろいろかかると思っています。そしていろいろ大変なところからきています。その中には一人一人はいろいろかかると思っています。そしていろいろ大変なところからきています。

そしてしんさいのまへの南相馬にもいろいろ大変なところからきています。そしてしんさいのまへの南相馬にもいろいろ大変なところからきています。そしてしんさいのまへの南相馬にもいろいろ大変なところからきています。

そしてしんさいのまへの南相馬にもいろいろ大変なところからきています。そしてしんさいのまへの南相馬にもいろいろ大変なところからきています。そしてしんさいのまへの南相馬にもいろいろ大変なところからきています。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 田原 悠生 年齢 12歳 職業・学校名 石神第一小学校

ぼくは、東日本大震災があ、てから思、た
ことは、みんな、2010年3月11日あの
時から、町の様子が、ぼく知、ている町では
ない気がしました。
理由は、つなみ、海の方ののうかす、家が
ながされて、家の中のうかを流された人たちが
放射線の危険のある所の人、どこか遠い所
へひなんしました。ぼくも、最初は、横浜の
方へひなんしました。二年生にな、てからは
福島県会津のアパートにひ、こしました。学
校では、友達が多くてき毎日がにぎやかでし
た。五年生にな、て、ここに帰、てきました。
帰、てきてひ、くりしたことは、近くのマッ
クがや、てなか、たこと、がフリンスタント
が経、ていたことです。
このようにたくさん、ひ害があ、たのは、
2010年3月11日からです。それらのこ
とから、これからの日本は、自然災害に強い
国にしていけばいいと思いました。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 山崎 達之 年齢 12 歳 職業・学校名 石神第一小学校

ぼくは、復興がどれだけ進んでいるのかわかりません。でも最近、周りに新しい家が建ってきたので、震災前のようにぎやがたなりつつあるのかなあと思いました。今後進むべき未来は、誰もが希望を持つ未来だと思います。学校の図書室で見つけた本を読んでいると、あとがきのところに本の説明が書いてあったので、読んでみることにしました。すると、本の著者の人が、3月の大震災と原発事故を、新作の原稿を書いている時にその映像を見て、「未来に希望をいいて、復興を実現できるように前を向ける、そんな物語を書いて届けたい」と思い、急ぎよ、この本を書き上げた事がわかりました。この本には「希望」の言葉が題名に入っていたので、著者の思いがより感じられました。なので、誰もが希望を持ち、常に前を向く未来に進むべきだと思います。

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 庄司 光騎

年齢 11 歳 職業・学校名 石神第一小学校

ぼくは、あの3月11日は、学校で友達数人と
 いた。とっぜん、立、ていることができな
 いほどのゆれが来た。なんと、原発がぼくは
 つした。それから約5年たった。たというのに
 放射線が高いのが原因で、外で遊ぶことが
 できる所が限られていて、じよ線作業員の人
 がきて、自分たちのためにじよ線をしてくれ
 ているのは、うれしいことですが、そのこと
 で、パチンコ屋ができこの土地のちあ人が悪
 くなった。ぼくは、未来の子たちに、山の自
 然の美しさ、川の水の安全性、事故のおきる
 ことのない南相馬市になってほしいと思う。
 交通量が多く、事故の起きやすい道があり危
 険なので、い。こくも早く、じよ線が終わり
 震災前の道で、交通量が減り、少し危険性が
 なくな、てほしいと思います。

自分が大人にな、た時には、未来の子たち
 が外で遊んだりして、放射線にとらわれな
 い町にな、てほしいと想、ています。

氏名 佐藤梨緒 年齢 12歳 職業・学校名 石神第一小学校

東	日	本	大	震	災	か	ら	、	早	く	も	5	年	が	経	ち	ま	す	。
最	近	で	は	、	除	染	作	業	を	す	る	た	め	に	、	ほ	か	の	
県	か	ら	車	が	い	っ	ぱ	い	出	入	り	し	て	い	ま	す	。	南	相
馬	市	は	、	お	年	寄	り	が	り	っ	こ	う	い	る	の	で	、	す	こ
く	危	な	い	と	思	い	ま	す	。	私	た	ち	も	、	歩	い	て	い	る
時	や	自	転	車	に	乗	る	時	も	気	を	つ	け	て	い	ま	す	。	
私	た	ち	が	、	こ	れ	か	ら	や	っ	て	い	く	こ	と	は	、	仮	
設	住	宅	に	住	む	人	達	を	安	心	し	て	住	め	る	よ	う	に	、
元	の	よ	う	に	、	戻	す	こ	と	だ	と	思	い	ま	す	。	で	も	、
た	だ	元	に	戻	す	だ	け	で	は	、	ま	た	、	津	波	が	来	た	り
災	害	が	起	き	た	り	し	た	時	同	じ	こ	と	に	な	っ	て	し	ま
う	の	で	そ	の	こ	と	を	考	え	、	改	良	す	る	こ	と	が	大	切
だ	と	思	い	ま	し	た	。												
私	は	、	元	の	よ	う	に	戻	り	、	外	遊	び	も	制	限	さ	れ	
ず	に	、	避	難	し	て	い	る	人	達	も	帰	っ	て	来	て	、	一	緒
に	遊	ん	で	、	田	ん	ほ	や	畑	が	ま	た	始	ま	り	、	津	波	や
災	害	を	お	そ	れ	な	い	南	相	馬	市	に	な	っ	て	ほ	し	い	で
す	。	そ	れ	が	私	が	考	え	る	未	来	で	す	。					

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 但野 舞衣 年齢 12 歳 職業・学校名 石神第一小学校

私	の	恐	う	福	島	の	今	の	現	状	は	、	あ	の	時	起	ま	た	
東	日	本	大	し	ん	災	か	ら	、	ど	ん	ど	ん	良	い	方	に	復	興
し	て	い	っ	て	い	る	と	思	い	ま	す	。	多	し	と	も	言	え	ま
せ	ん	が	、	学	校	の	友	達	も	、	少	し	ず	つ	戻	っ	て	ま	え
い	ま	す	。	閉	ま	っ	て	い	た	お	店	も	少	し	ず	つ	開	店	し
始	め	て	い	る	の	で	、	こ	の	ま	ま	復	興	を	か	ん	ば	っ	て
い	け	ば	、	も	と	の	平	和	な	福	島	に	も	ど	る	と	思	い	ま
す	。	私	も	し	ん	災	の	と	き	は	ひ	な	ん	し	て	い	ま	し	た
が	、	放	し	ゃ	の	う	も	減	っ	て	ま	た	と	い	う	こ	と	ど	ぞ
年	生	の	と	き	に	帰	っ	て	ま	し	た	。							
こ	れ	か	ら	の	福	島	の	未	来	は	、	あ	ま	り	良	い	印	象	
か	ら	い	い	の	で	、	外	国	人	も	来	て	く	れ	る	よ	う	な	
明	る	く	て	、	来	て	良	か	っ	た	と	思	わ	れ	る	よ	う	な	
注	目	さ	れ	る	場	所	に	な	っ	て	ほ	し	い	で	す	。	こ	こ	は
い	な	か	た	け	ど	、	い	い	所	か	た	く	さ	ん	あ	る	の	で	
え	の	福	島	の	い	い	と	こ	ろ	を	世	界	中	に	教	え	て	、	福
島	は	、	と	て	も	い	い	場	所	な	ん	だ	な	と	感	じ	て	も	ら
え	る	た	め	に	、	元	の	福	島	に	も	ど	る	た	め	の	復	興	を
選	め	て	い	っ	て	ほ	し	い	で	す	。								

(20文字 × 20行)

氏名 渡邊 みちる 年齢 12 歳 職業・学校名 石神第一小学校

私	は	、	東	日	本	大	震	災	か	ら	た	く	さ	ん	の	こ	と	を		
学	び	ま	し	た	。	震	災	の	お	そ	ろ	し	さ	、	友	達	と	の	別	
れ	の	つ	ら	い	な	ど	い	ろ	い	ろ	な	気	持	ち	が	あ	ふ	れ	出	
し	ま	し	た	。	私	は	震	災	後	大	分	県	に	ひ	な	ん	し	て	い	
ま	し	た	。	そ	こ	で	は	新	し	い	友	達	と	出	会	う	こ	と	が	
で	ま	し	た	。	で	も	そ	れ	は	震	災	の	お	か	げ	だ	と	思	い	
ま	す	。	私	は	震	災	で	知	り	合	い	を	な	く	し	て	い	な	が	
か	っ	た	け	れ	ど	、	福	島	に	も	ど	、	ア	モ	ひ	な	ん	し	て	
会	え	な	い	人	が	た	く	さ	ん	い	ま	し	た	。	な	の	で	大	分	
の	友	達	に	会	え	て	う	れ	し	い	の	か	、	福	島	の	友	達	で	
会	え	な	い	人	が	た	く	さ	ん	い	て	さ	び	し	い	の	か	自	分	
で	も	良	く	分	か	ら	な	い	気	持	ち	に	な	り	ま	し	た	。		
な	の	で	私	は	復	興	を	続	け	て	ほ	し	い	で	す	。	そ	れ		
は	、	ま	た	ひ	な	ん	し	て	い	る	福	島	の	友	達	が	も	ど	、	
ア	ク	る	可	能	性	が	あ	る	と	思	う	か	ら	い	で	す	。	み	ん	な
ハ	ラ	バ	ラ	に	な	、	た	の	は	一	年	の	終	わ	り	だ	っ	た	の	
で	思	い	出	も	な	い	の	で	、	も	ど	っ	ア	来	た	ら	思	い	出	
を	作	り	た	い	な	と	思	っ	て	い	ま	す	。							

「東日本大震災からの復興への想い」応募用紙

氏名 林 千優 年齢 11 歳 職業・学校名 石神第一小学校

私	が	東	日	本	大	震	災	を	経	験	し	た	の	は	、	小	学	一	
年	生	の	時	が	す	、	急	に	ひ	難	し	て	、	今	ど	こ	に	い	る
の	が	分	か	り	ま	せ	ん	で	し	た	、	二	年	生	に	な	り	、	体
育	館	で	勉	強	を	始	め	た	時	、	私	の	学	年	は	七	人	し	か
い	ま	せ	ん	で	し	た	、	仲	の	良	か	、	た	友	達	も	い	な	く
な	り	、	と	て	も	さ	び	し	か	、	た	で	す						
今	は	、	な	ん	人	か	も	ど	、	て	き	て	、	と	て	も	楽	し	
い	ク	ラ	ス	で	す	、	そ	れ	で	も	、	も	と	の	人	数	の	半	分
ほ	ど	し	か	い	ま	せ	ん	、	や	っ	は	り	さ	び	し	い	気	が	し
ま	す																		
今	も	、	除	染	作	業	は	や	、	て	い	ま	す	が	、	も	ど		
て	こ	な	い	の	で	、	や	っ	て	も	意	味	な	い	と	思	い	ま	す
で	も	、	そ	の	お	か	げ	で	、	外	で	た	く	さ	ん	遊	べ	る	の
で	た	す	か	、	て	い	ま	す	、	除	染	作	業	は	こ	れ	か	ら	も
続	け	た	方	が	良	い	と	思	い	ま	す	、	そ	し	て	、	表	津	に
早	く	、	た	く	ざ	ん	も	ど	、	て	き	て	あ	ら	い	た	い	が	す
ま	た	、	ま	え	の	に	ぎ	や	か	な	南	相	馬	市	に	も	ど	、	
震	災	前	の	よ	う	な	、	平	和	を	暮	ら	し	が	し	た	い	が	す
そ	し	て	、	楽	し	い	中	学	校	生	活	を	お	く	り	た	い	と	思
い	ま	す																	

(20文字 × 20行)

匿名希望

夫	は	震	災	前	年	4	月	入	院	白	血	病	で	し	た	。	母	娘		
で	約	1	年	間	看	病	、	4	月	中	頃	に	待	望	の	骨	髄	移	植	
決	、	回	復	を	期	待	し	て	い	た	矢	先	の	震	災	で	と	て	も	
悔	ま	れ	ま	す	。															
私	は	当	時	西	会	津	に	居	て	勤	務	後	若	松	の	病	院	へ		
直	行	、	夫	は	約	1	週	間	前	か	ら	歩	行	訓	練	を	開	始	、	
6	階	病	棟	は	暖	房	や	水	道	管	が	は	ず	れ	た	為	蒸	気	と	
水	が	出	、	職	員	の	あ	わ	て	い	る	た	め	く	中	自	力	で	避	難
担	当	医	師	が	外	来	に	1	室	用	意	し	て	く	だ	さ	い	ま	し	
た	。	次	の	日	救	急	車	で	高	速	道	路	使	用	し	福	島	医	大	
◇																				◇
転	院	、	断	水	と	節	電	、	物	資	も	少	な	く	、	2	0	日	頃	
白	血	病	と	肺	炎	普	段	一	緒	に	し	な	い	の	に	同	時	に	化	
学	療	法	を	開	始	の	状	況	で	の	週	末	看	病	で	し	た	。		
我	家	は	夫	の	死	亡	に	よ	り	大	黒	柱	を	失	い	悪	戦	苦		
闘	で	5	年	経	過	、	娘	達	は	右	往	左	往	し	な	が	ら	も	歩	
み	続	け	て	い	ま	す	。	私	も	無	我	夢	中	で	経	過	、	夫	健	
在	中	主	に	職	場	に	注	い	で	き	た	力	を	、	方	向	転	換	、	
入	院	後	で	き	る	だ	け	家	庭	に	全	力	投	球	し	、	地	に	足	
の	着	い	た	幸	せ	な	生	活	が	で	き	る	よ	う	こ	れ	か	ら	も	
皆	で	力	を	あ	わ	せ	、	一	つ	一	つ	勉	強	し	な	が	ら	や	っ	
																				◇

氏名 _____ 年齢 _____ 歳・職業・学校名 _____

て	い	き	た	い	と	思	い	ま	す	。										